様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月　20 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０２０１
研究課題名（和文）　トランス・ナショナル史の視点からみるアメリカ型福祉国家体制の起源

研究課題名（英文）　An Origin of American Welfare State in a Transnational Context

研究代表者
松原　宏之（Matsubara Hiroyuki）
横浜国立大学　教育人間科学部　准教授
研究者番号：０ ０３３４６１５

研究成果の概要：
1930 年代に成立するとされるアメリカ型福祉国家の起源を探るには、国内史だけでなく、網の目をなすトランス・ナショナルな人と情報の流通を 1900 年代から 1910 年代に遡って視野に入れねばならない。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	210,000	2,710,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学　西洋史

キーワード：政治文化、ジェンダー、トランス・ナショナル史、福祉国家、共和主義、女性参政権運動、ニュージーランド、労働運動

１．研究開始当初の背景

アメリカ歴史学界において、1990 年代以降の母性的福祉国家論の台頭を起点に、福祉国家研究が活性化しつつあった。ただし、ダニエル・ロジャース(Daniel Rodgers)らのトランス・ナショナルな社会政策研究は、当該領域の射程を大きく拡張する必要性を示唆し始めていた。すなわち、アメリカ国内の事情を、国際関係や人や思想や運動の移動・交流・連携といった文脈において検討することが求められ始めたのである。

また当研究が構想された時期、および関連研究が相次いで発表された社会背景として、

新自由主義の隆盛は付記に値する。市場原理重視するこの議論への検証・対抗が模索されていた。いくらか角度を変えて整理するなら、グローバル化の進展とあわせて、従来の福祉国家像を再考する条件が揃い始めていたと言える。

２．研究の目的

1930 年代に成立するとされるアメリカ型福祉国家体制の起源を、1900 年代から 20 年代にさかのぼって国際（トランス・ナショナル）史の観点から検討するのを目的とした。

アラン・ドーリー(Alan Dawley)らが整理するように、世紀転換期をむかえて、アメリカ合衆国において、独立期から十九世紀にかけて主流をなした共和主義にはかげりがみえていた。このときいかなる社会政策を採用するかは、誰が、どのような知識、いかなる価値観をもって、アメリカ社会の主導権を握るかを占う試金石であった。いわゆる社会政策の時代である。

ただし当時､アメリカ国内のみを念頭にこの方向づけができたかは疑わしい。ロジャースらが示唆したように、世界各地の先進地域での動向をにらみながら、この主導権争いは展開されたと思われる。留学に代表されるような人的交流。必ずしも一国内でなく広い流通経路をもった雑誌を介してのコミュニティ。そして、社会運動における情報・戦術・人材の交流。こうした過程は周縁的な出来事とは言い得ないボリュームで展開されていた形跡がある。

これまで十分には検討されてこなかったこのトランス・ナショナルな知のネットワークの一角に実証的調査を加えるのが本研究の中心である。国家・行政を担い手とするような社会政策だけを調査対象として前提とせず、「社会」と「福祉 welfare」のありようをめぐる広範な思想と運動とを射程に入れたい。

３．研究の方法

大きく三つの方向で進めた。

（１）

二十世紀初頭アメリカにおけるソーシャルワーカーが中心となった雑誌 *Survey* と、慈善更正全国会議（National Conference of Charities and Correction）とを中心とする史料調査。

Survey については、ニューヨーク大学所蔵のマイクロフィッシュ史料を、データベース Readers’ Guide Retrospective からインデックスを作成して調査研究した。(なお、Survey 誌については近年グーグル･ブックスにいくつかの号が収録され始めている。その全容は未検討。)

慈善更正全国会議については、ミシガン大が提供するポータルサイト National Conference on Social Welfare Proceedings (1874-1982, http://quod.lib.umich.edu/n/ncosw/)が起点を提供してくれる。

会議自体はその性質を変えながら長期にわたって継続されている。今回の調査ではとくに、当時の社会政策関連事業の「専門職」化に大きな発言力を有した Abraham Flexner の 1915 年会議での発言前後を画期とみて検討を試みた。

（２）

ニュージーランド国立図書館における史料調査。とくに Alexander Turnbull 図書室において、二十世紀初頭の同国における社会政策論争関連史料を検討した。

トランスナショナルなやり取りを含む性衛生学・社会衛生学関連史料を起点に、アメリカ合衆国における十九世紀末思想家・運動家である Henry George の受容などへと調査を広げた。

なお、ビクトリア大学歴史学部のシャーロット・マクドナルド(Charlotte Macdonald)から情報提供を受けた。記して感謝する。

（３）

ニューヨーク大学のリンダ・ゴードン（Linda Gordon）やドン・クーリック（Don Kulick, 当時、ジェンダー・セクシュアリティ研究所)、プリンストン大学のダニエル・ロジャース(Daniel Rodgers)らをはじめとする関連研究者との意見交換。

クーリックおよびジェンダー・セクシュアリティ研究所からは格別の便宜を受けた。同研究所を介したニューヨーク大学図書館の協力を得られたことは、とくに研究初期における史料探索におおいに役立った。とくに謝辞を記しておきたい。

４．研究成果

従来､国内史の文脈で説明されることの多かったアメリカ福祉国家論に、国際史（トランス・ナショナル史）の視点を導入する端緒を得た。同時に、その「トランス・ナショナル」な経路を具体的にたどることの困難それ自体が次なる研究課題への道をひらくよう

に思われる。

研究構想当初に中心とみていたのはロックフェラー財団に代表される資金力のある組織であった。しかし、調査を通じて、ソーシャルワーカーをはじめ、より広範な社会改良運動が浮上したのは特筆すべきである。

とりわけ、ふたつの媒体・組織は重要と思われる。

すなわち第一に、十九世紀型慈善団体から衣替えをはかって、*Charities and the* commons から *The Survey: social, charitable, civic : a journal of constructive* philanthropy へと誌名を変更するソーシャルワーカー機関誌である。同誌は、執筆者とテーマの広がりにおいて狭義のソーシャルワークの範囲にとどまらない意見交換・議論形成の場であったと思われる。

第二に、慈善更正全国会議（National Conference of Charities and Correction）も、やはり広く当時の社会運動に関わる諸勢力が課題設定を共有し交わる場として無視できない。

「慈善」や「更正」といった語の持つ意味を見誤ってはならない。十九世紀末からのアメリカにおいて、その秩序をいかに再編するかは大きな課題であった。個人をベースとするモデルの機能不全があきらかになるなかで、慈善 charity とは単なる施しではなく、見失われた「社会」を視野に入れ直しその再建をさぐるときのひとつの有力な基盤として見直されつつあった。

「慈善」のいわば「専門化 professionalization」をめぐって 1910 年代半ばにその様相にひとつの変化を見せ始めるこの会議は、当時の社会政策論争上無視できない議論を提起する。こちらの調査は依然として十分とは言えないが、アメリカ福祉国家体制の原型にかかわる諸団体がその広がりとともに見えてくる。

まさにこうした広い裾野において、福祉構想や社会政策をめぐるアイデアや出版物はトランス・ナショナルに交換・流通していくのがうかがえる。

ただし、人、情報、出版物の流通は、単に国と国とをまたぐ線ではとらえがたい。とりわけニュージーランド調査であきらかになったのは、ハブとなる都市やチャンネルをなす航路を流通する複雑な広がりを射程に入れねばならないことであった。

アメリカ側から見ていては見落としていたのは、ニュージーランド国内の情報集積地ウェリントンから、一方ではアメリカ西海岸への道があるとともに、他方でロンドンを入り口とする別経路がある。これらは、さらなる分岐と交差とを重ねて、思わぬところで意外な名前を目にすることになる。アメリカ側史料からはなかなか事情をつかみきれずニュージーランドへの現地調査が最終年度にずれ込んだのは残念と言わざるを得ない。

ともあれアメリカ福祉国家へといたる諸潮流の具体像が増すとともに、ハブとなる都市、地域、人、組織をより絞り込んだ追跡の必要性が浮かび上がってきた。次の研究計画の起点を得たという意味でも、本研究は意義深いものであった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Matsubara, Hiroyuki （松原宏之）. "Sometime Allies, Sometime Competitors: Men and Women in the Commission on Training Camp Activities, 1917-1919." *The Proceedings of the American Historical Association 121st Annual Meeting,* pp. 1-13, #10485, 2007. 査読なし

〔学会発表〕（計２件）

①松原宏之「20 世紀初頭アメリカにおける性衛生学者の難渋 ― 近代社会像の競合と混成 ―」（シンポジウム「『近代の知』をめぐるせめぎ合い― 世紀転換期～戦間期の世代・ジェンダー・抵抗 ―」）日本西洋史学会第58回大会(於島根大学)、2008 年 5 月 11 日.

②Matsubara, Hiroyuki （松原宏之）. “Sometimes Allies, Sometimes Competitors: Men and Women in the Commission on Training Camp Activities, 1917-1919,” 122nd Annual Meeting, American Historical Association, January 5, 2007, Atlanta.

〔図書〕（計２件）

①松原宏之「映画『サヨナラ』が織りなす「日本」像―交錯する戦後日米史」横浜国立大学留学生センター編『国際日本学入門―トランスナショナルへの１２章』成文社，2009，130-42.　査読あり。

②松原宏之「異性愛という制度―現代アメリカ同性婚論争の根にあるもの」有賀夏紀・久保文明編『個人と国家のあいだ〈家族・団体・運動〉』ミネルヴァ書房，200

7, 19-41. 査読あり。

６．研究組織
(1)研究代表者
松原　宏之（Matsubara Hiroyuki）
横浜国立大学　教育人間科学部　准教授
研究者番号：００３３４６１５

(2)研究分担者

(3)連携研究者